安積五郎と清河八郎（下の二）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 徳田, 武 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7125

明治大学教養論集　通巻四四一号（二〇〇九・一）七三―一三七頁

安積五郎と清河八郎（下の二）

徳田　武

本稿は『明治大学教養論集』通巻四一八・四二五・四三〇号「安積五郎と清河八郎」（上）（中）（下の一）を承けるものである。

五十四　江田大之進との別れ

奔走すること合計八日、夜になって遠野に到着した。探索の目を恐れて、ひそんで歩き、大之進の家に入った。大之進は喜んで出迎え、八郎たちの無事を祝って言う。

「城下より何の沙汰も無い。探索が来る事があろうか。安心されよ。君の行くえも、うまく暗ましておいたから、大丈夫だ。先日は失言してしまって、まことに恥じ入る。けれども、君を思うあまり、ああなったのだ。「過ちを観て斯に仁を知る」（『論語』里仁）という物だから、許してくれ。もし、この事で君らに足が付いたならば、まことに志士として恥ずかしい。だから苦労して跡を掩い隠した。安心されたい。僕の失言が無かったならば、君たちをゆっくり潜ませられたのに。残念だ」

「御厚意に感謝の言葉もありません。が、大分日時も過ぎたので、仙台に戻らねばなりません」

かくて、その夜はゆっくりと語り、「重九詩」および「長嘯子記」を書き残し、**九月十八日**、別れを惜しんで八郎と五郎は、江田大之進の家を去った。大之進の失言は、まことに「不慮の患い（予想もしない災難）」というべきものであった。

この時の逸話を大之進の娘の目沢真弓が後日、八郎の遺族に語っており、それを大川周明は、

清川さんが来られた時は、門が非常に腐れて破損して居ました。清川さんは出立の際、門前で父に別れる時、「此門を見ては軍用金は貰って行けぬ」などと笑って去られたと、母が時々申されました。

と伝えている（『清河八郎』九〇頁）。

八郎が残していった「長嘯子記」（「記長嘯子説」とも）の訓読を掲げてみよう。

友人士固、長嘯子を以て人に称せられ、遂に以て自ら号す。而るに人其の長嘯子たる所以を知る莫し。吾以て之が説を立つるを得たり矣。或ひと曰く、「長嘯子は諸葛氏に比する所以なり」と。吾曰く、「否、彼は自ら彼なり、我は自ら我なり。以て士固を栄とするに足らざるなり」と。「然らば則ち士固は詩を賦して文を属すること、一瀉千字、水湧きて風生ずるが若し、以て長嘯子と為さば可ならんか」と。曰く、「否」と。「然らば則ち士固は酒を飲むこと一飲一斗、雄談人を動かす、以て長嘯子と為さば可ならんか」と。曰く「否」と。「然らば則ち士固は筆を執るや、画は万頃の煙波の如く、書は流水の東に注ぐが如し、以て長嘯子と為さば可ならんか」と。曰く、「否、是れ長嘯ならざるなり。且つ夫れ此の数者を以て士固を品す、是れ則ち士固は一の風流子、一の蘇大士（ママ。学か）にして可なるのみ、何ぞ士固に責むることの甚だ軽きや。吾意ふに、士固の長嘯たるや、蓋し其の家系に在るのみ。吾聞く士固の主家と、士固の祖先と、倶に南朝堂々の臣たり、金石は竹帛に存し、賞賜は子孫に貽らる。吁、亦た壮と謂ふ

べし矣。而して天地既に定まるに及び、当時相仇讎視する者、或いは皇家に顕達す。而るに勤王の子孫たる者、独り天下に較著(あきらか)すること能はず、是れ豈忠臣孝子の一日も念を遺る所以ならんや。夫れ臣として其の君を旌せんと欲し、子として其の祖先を顕はさんと欲するは、固り人情の至り、而るを況んや士固の志気に於けるをや。而るに時に命有り、幸いにして致すべからず、則ち唯だ諸(これ)を心に存するのみ、諸を心に存し、然る後に口に嘯(うそぶ)く、是れ乃ち士固の長嘯する所以なり。余、士固と莫逆の交りを為す。是の説を以て之を質(ただ)す。士固笑ひて止(とど)め、且つ言ふ、「以て存すべし」と。乃ち書して之に贈る。

この文は、大之進の大之進たる所以を、詩文書画を善くし、斗酒雄辯なる所に求めず、南部家と江田家の祖先の勤王を表彰せんとする志気が長く嘯かれている点に求めようとするものである。もっと端的に言えば、大之進を勤王の志士として位置づけようとしているのである。このように大之進を顕彰する文と、前引した詩とを製作し、それを大之進の家に遺すことによって、八郎は大之進への謝意を表わそうとしたのである。

右の解釈は、八郎が『潜中始末』に、

大之進は旧交を思ふのみならず、元来大侠気の男故、我等を深切する事遺憾なし。当家は勤王の事、古来天下に響き、拝領物等色々あり。勤王の志、今に盛なり。故に頗る相励まし、時ありて奮興すべき計策を相貽(のこ)す。共に離別をぞ感じける。

と言っていることに拠っても確認できよう。

なお、大之進の逸事が岡鹿門の『在臆話記』第五集巻一〈江田大之進〉に見える。それをも挙げておこう。

大之進は、南部郷音（なまり）にて、田舎武骨なる、酒膽斗大、大酔の後は、南朝忠義の子孫と自ら誇り、四、五十人の生徒、能く其鋒に触る者なく、毎丶酒失あるを以て、禁酒の長篇あり。飯山好んで之を誦す。極めて奇男子なり。

鹿門は安積艮齋に師礼をとったから、右は艮齋塾における大之進の様子を伝えたもの、と言うことができる。同門の俊才松林飯山が大之進の禁酒詩を愛誦した、という事実が、これによって始めて知られるのである。

五十五　高館にて義経を思う

八郎と五郎は、鬼首（おにこうべ）の方に行く積りで、五輪峠（ごりん）（花巻市東和町田瀬）を越え、また仙台領に出て、その日は岩井堂町に泊った。翌**九月十九日**、水沢に出て、穏やかに晴れた中を高館・衣川に至った。案内人を求めて、藤原秀衡三代の遺址を探る。諸堂は荒れて侘びしく、大層物思いを誘う。

そも〳〵義経主従がこの地に至った時、けわしい道に難儀を極め、変装して姿をやつし、辛苦至らざる所無き思いをした。しかるに、世の中が治まると、彼らが難儀した跡は、ことごとく後人の口碑となって、一指一目を寄せた地といえども、好んで見物されて朽ちない。功はその当時に樹てられなかったが、名は千載の後に残った、といえよう。勉めなくてはならぬ。

義経は敏捷で才略があり、不世出の軍略家であるが、天皇家のために犠牲となったことを、後世の識者は残念がる。それに引替え、我らは何者か、為すこと有らんとするにおいては、どうして譲ろうか。そうとすれば、今は難儀し辛苦していても、千歳の後には、安坐して為す所の無い者よりも優る存在になろう。ああ（『潜中紀略』二）。

かくて懐古の詩、「遠野より五輪嶺を越え水沢に出で、衣川に至り、藤原氏の旧跡を探る。諸堂落拓、頗る人心を感

ぜしむ」四首（『潜中紀事』）を作った。

山紫水明秋已深　山紫　水明　秋已に深し
奥東行路毎傷心　奥東の行路　毎に心を傷ましむ
後三前九雄図尽　後三　前九　雄図尽き
感服梅花一首吟　感服す　梅花　一首の吟

秋は深まり、山は青く、水は清い。
奥州の東部の道を行くたびに感傷的になる。
源義家が前九年・後三年の役で奥州を鎮定したのは、その昔の事、
今はただ梅花を詠んだ一首の和歌に感動されるだけ。

前九年の役・後三年の役で東国を鎮定した源義家を詠じた作であるが、「梅花」の吟とは、第三十八節にも引いた彼の「吹く風をなこその関と思へども道もせに散る山桜かな」を誤って言ったもの、と思う。第二首に言う。

兵馬当年敵已無　兵馬　当年　敵已に無し
鎮撫奥羽大雄図　奥羽を鎮撫す　大雄図
豚児誤為鯨鯢食　豚児　誤りて鯨鯢の為に食はれ

空使行人訪旧途　空しく行人をして旧途を訪はしむ

当時、源頼朝は平氏を討って、その敵はもはやいず、
奥州を平定しようという大きな計画を抱いた。
愚かな子が行き方を誤って大敵に征伐され、
むなしく私をして義経の旧跡を訪わせることになった。

「豚児」とは、藤原秀衡の子泰衡を指し、彼が義経を殺害した後、源頼朝から攻撃され殺された事を詠じていよう。
第三首は次のようなものである。

蕭瑟衣川秋路行　蕭瑟たり　衣川　秋路の行
四山黄落繞斜陽　四山　黄落して　斜陽を繞る
英雄遠去空留迹　英雄　遠く去りて　空しく迹を留む
千載議論一夢長　千載の議論　一夢長し

衣川辺りの道を歩いていると秋は侘しく、
落葉した四方の山山が夕日を取り巻いている。
ここに居た英雄は遥か昔に亡くなり、遺跡のみが空しく存し、

千年後にまで議論が続けられ、英雄の夢は長く残る。

これは義経の事を詠じていよう。千載の議論とは、前に訳出した『潜中紀略』二の身後の名の論をいうのであろう。

第四首は、詩体を異にする。

行過莫処不傷心　行き過ぎて　処として傷心せざるは莫し
雄略已竭遺鉄沈　雄略　已に竭きて　遺鉄沈む
三世廟堂光気落　三世の廟堂　光気落ち
棲禽高去衣川林　棲禽　高く去る　衣川の林
豚児綜跡与塵銷　豚児の綜跡　塵とともに銷え
節士山墟松柏深　節士の山墟　松柏深し
噫汝戒之興滅理　噫　汝　之を戒めよ　興滅の理
一時耽利身先擒　一時　利に耽らば　身　先づ擒はれん

歩いて行くと、どこも彼処も悲しみを催す。
奥州平定の計画も消えて、埋もれた武器がのぞいているから。
藤原氏三代に亘る建物は色あせて、
衣川の林に住んでいる鳥は高く飛び去る。

愚かな秀衡の遺跡は塵とともに消滅し、
天皇に尽くした義経の住居跡には松柏が茂っている。
ああ、君よ、自戒したまえ、興亡の理とは、
目先の利益ばかりを追うと、自分が真っ先に滅びるものだ、という事を。

七言八句の詩であるが、第三・四句を対句とはしていないので、律詩ではなく、古詩とする。第六句、泰衡と比較される「節士」とは、やはり先に述べている、天皇家の犠牲となったという義経を指していよう。

五十六　熊谷徳蔵

一の関に到り、まず宿屋に入った。旅費が乏しいので、剣士熊谷匱蔵（徳蔵）を訪れ、援助を求めようという事になった。元来、それほどの人物ではないが、しかし、害はあるまい、という事で、書状をしたため、安積五郎に託して届けさせた。

「それならば、二里ほど離れた五串（いつくし）の滝で出会おう」

という返事なので、宿を出て、城下より北の五串の滝（岩手県一関市厳美町）に行った。谷川の景色が大層良く、白川楽翁（松平定信）の篆額を彫り入れた、松崎某の石碑がある。暫く休んでいると、匱蔵および熊谷米三郎の忰たちが瓢を携えて、やって来た。米三郎は、八郎が以前世話した者である。川辺に敷物を布いて、遠まわしに事情を話すと、元来、かたくなな者なので、一向に話にならない。ただ、来てくれた親切に報いるため、暫くの間、酒を酌み交わした。

夜になる頃、一の関の城下に帰り、やむを得ずまた別の旅館に宿泊した。五郎と、

「今日の徳蔵の様子は、頼りにはならなそうだが、一旦面会したからには、ともかく頼んでみよう」

と相談して、「路用を少し借用致したい」と申しやった。が、何を言っているのか分らない返事を寄こした。まことに詰まらない男だ、と思われる。この用件のため**十九・二十日**と二日ほど滞在となって、なおさら旅費に困るようになった。

潜匿の間に知人を尋ねて、意思が疎通しなかったのは、この時だけである。八郎は、もとより徳蔵を深く信じていた訳ではない。通りかかったので、たまたま訪れただけである。だから、自らを責めるには及ばない。後日、伊牟田真風も、八郎を追いかけて来た折に、遇せられず、大いに苦しんだ、という。人情の移ろいやすさは、もとより一通りではない。

九月二十一日、

「然らば、国元近くの者を尋ねて、様子を探ろう」

と、一の関を立ち、西に向かい、川口にそって、その日は泊った。

五十七　六角峠

九月二十二日、早朝、六角嶺（六角牛山。岩手県遠野市）を越える。冷風が面を撲ち、空気が大層爽やかである。「一関に至り、剣士某と西のかた五串瀑を看、且つ路資を仮らんと欲するも果たさず、空しく二日を費やし、遂に川口に至り、鬼首に入り、六角嶺を越えて、即ち賦す」という詩を賦した。

曉起高攀六角巔　曉に起き　高く攀づ　六角の巔
秋風卷雲天気鮮　秋風　雲を卷き　天気鮮かなり
千里沃地眼下露　千里の沃地　眼下に露はれ
乃公計略馬上鞭　乃公の計略　馬上の鞭
時平白髪勧行楽　時平かにして　白髪　行楽を勧め
世久中原勢已遷　世久くして　中原　勢ひ已に遷る
山河歴々旧自若　山河　歴々として　旧自若たり
令孫継弘乃公伝　令孫　継弘す　乃公の伝
感古歎今仗剣賦　古へに感じ　今を歎じ　剣に仗りて賦す
立見風雲背嚮旋　立ちどころに見る　風雲　背嚮して旋るを
怪底龍蛇躍脚下　怪しみ底たり　龍蛇　脚下に躍ると
訝底吾人駕長天　訝り底たり　吾人　長天に駕するかと

早朝に起きて六角峠の高い頂上まで登ると、
天気は爽やかで、秋の風が雲を巻き上げている。
千里のかなたまで肥沃な土地が俯瞰されるが、
軍馬にまたがって伊達政宗侯が平定を企てた所だ。
太平の世になると、侯は白髪になっていたが、楽しむ事を勧め、

時はたって、中央の江戸では徳川家の勢いがもはや衰えている。
が、山河はありありとして、以前からどっしりと存在し、
侯の御子孫は後を継いで、政宗侯の伝統を伝えている。
古の事跡に感じ、当代の事情を嘆息して、私が太刀を支えとして詩を賦していると、
たちまち風に煽られた雲が背中の方へ廻っていく。
竜蛇が足元から躍り出たのかと怪しまれ、
私が天上を駆けているのかとも訝られる。

六角峠からは仙台平野が俯瞰できたのであろうか、八郎は、そこを掌握した伊達政宗を想起し、漢詩が上手であった政宗の有名な五絶「馬上青年過ぐ、時平かにして白髪多し、殘躯は天の許す所、楽しまずして如何せん」（「興を遣るの吟」）を踏まえて、政宗の計略（政治）が現在に至るまで脈々として伝えられ、対蹠的に今日においては徳川氏は衰えている、と言いたいもののようである。また、「継弘」は、見なれぬ語ではあるが、継ぎ広める意で用いているのであろう。

五十八　轟の湯

六角巓を下ると、鬼首に入る。四面皆山の中に別天地のような土地があり、処々に温泉が湧出している。轟の湯（宮城県大崎市鳴子温泉鬼首字轟）に二日間（**二十二・二十三日**）滞留した。仙台城下からは二十里ほど離れ、浴客は少な

く、潜匿には恰好の地である。朝暮、見聞するものは山色と水音のみ、食べるものは菜根と豆・粟だけ、唐の李愿が隠棲した盤谷のようである。このような土地におれば、毀誉褒貶にも関わらず、昇進や左遷にも預からず、苦も無く楽も無く、天然のままの生活を送れるのであるが、悲しいかな、一片の壮心は猶も尽きず、いたずらに権勢の世界（形勢）に奔走し、空しくこの艱難を痛ましく思うだけである。そこで、韓愈の「李愿の盤谷に帰るを送る序」に擬して詩を作った。題は「鬼首に至り、四面は皆山岳、中に温泉数個有り、頗る盤谷の形勢を為す、清閑にして去るに忍びず、二日轟に浴し、此の作有り。韓文の李愿を送る序に擬す」という。

山繞為盤谷　山繞りて　盤谷を為す
水甘注湯泉　水甘くして　湯泉を注ぐ
嘗困形勢裡　嘗に困しむ　形勢の裡
転覚適真仙　転た覚ゆ　真仙に適するを
丈夫不世用　丈夫　世に用ゐられず
閭巷講文武　閭巷に　文武を講ず
自卑混賈児　自ら卑しむ　賈児に混ずるを
毎慕高挙許　毎に慕ふ　高挙の許
節屈不忍去　節屈して　去るに忍びざるも
勢変為僭人　勢変じて　僭人と為る
寧致濁世力　寧ぞ濁世に力を致さんや

終為潛匿身　終に潛匿の身と為らん
旗鼓不易樹　旗鼓　樹て易からず
将相難致位　将相　位を致し難し
形勢非所堪　形勢　堪ふる所に非ず
盤谷真適意　盤谷　真に意に適ふ
進退不人牽　進退　人に牽かれず
毀誉亦不侵　毀誉も　亦た侵さず
無苦又無楽　苦も無く　又た楽も無し
木石比是心　木石　是の心に比す
豈壮士所能　豈　壮士の　能くする所ならんや
不若奉旧盟　若かず　旧盟を奉ぜんには
旧盟設不就　旧盟　設し就らずとも
即知天命傾　即ち天命の傾けるを知る

ここ鬼首は、山がめぐって盤谷のような谷を形成し、
おいしい水が温泉に注いでいる。
私はいつも権勢を求めて苦しんでいるので、
ますますここが真に仙人になれる所だと思う。

立派な男子たる私が世に用いられず、
市井で漢学と剣術を教授している。
自分でも商人と雑居していることを恥じ、
俗世を避けて高く行い澄ましている人物を常に慕っている。
志を枉げて撤退するのに忍びなかったが、
情勢が変わって逃亡者となった。
どうして濁った世に力を尽そうや、
いっそ逃亡者となりはてようか。
軍隊を動かすことは難しく、
宰相や武将の位にはなりがたい。
権勢の世界には耐えられないが、
盤谷は本当に我が意に適った所だ。
進むにも退くにも人から影響されないし、
そしられも褒められもしない。
苦しみも無く、楽しみも無く、
この心を木石のように虚無にしていられる。
だが、そうした境地に、どうして志士たる者が居れようや。
仲間との誓いを守るにこした事は無い。

仲間との誓いが、たとい成就できなかったとしても、
天命が味方しなかった、と思うばかりだ。

この詩はまず、鬼首を盤谷のような桃源境に見たて、平生、権勢（形勢）を求める政治的世界に辛苦しておればこそ、また不遇で市井に商人と雑居しているからこそ、盤谷のような仙境と、許由の如き高潔な行いとを慕っている、と詠い出す。そうして、一旦、誤ちを犯して、心ならずも、潜匿の境涯となり、将相のような権勢は得られる筈もない事が分ると、盤谷は更に理想境と思われるのである。そこに居りさえすれば、苦楽は無く、心を木石のように平静に保っていられる。しかし、愛妾お蓮や同志を牢獄にやらざるを得なかった八郎が、そのような仙境に留まっておられる筈も無く、彼は同志を再び糾合する道に進むほかは無いのである。たとい、その志が成就できなくとも、それもまた天命なのである。このように、八郎の心は二転三転するが、結局は志士としての道を歩み続けようと再度決意を固める、という経緯を表した詩なのである。

五十九　星の湯

九月二十四日、鬼首から一坂越えると、新荘藩領の向町（山形県最上郡最上町向町）に出るが、ここはもう郷国出羽である。八郎だけが密かに宿屋に入り、安積五郎を郷里近くの、かねて懇意の者（商人）の家に遣わして、旅費を無心し、かつ国元の様子を伺わさせる事にした。潜匿中、郷国に入ったのは、これで三度めであるが、自身では一度も家に消息を通ずることができず、感慨はここに極まった。二日過ぎて、**九月二十六日**、五郎が帰って来て、

「まだ確かな事は分らない。これから鳴子まで行き、そこで休みつつ、また様子を伺おう」

と言う。

仙台藩領の鳴子（宮城県大崎市鳴子温泉）に行く間には境番があるので、気づかわしく思っていたが、天の助けであろうか、国境の手前の、道から三町ほど入った山際に、星の湯という温泉があった。そこに二日（**二十六・二十七日**）泊り、その間に五郎を再び懇意の商人の所に遣り、八郎は独り静かに過ごすことにした。山を抱き川に臨み、頗る僻地で、家は僅かに二軒のみ、湯壺は一つだけで、切り傷・火傷などに奇効がある。しかし、鳴子や赤湯温泉のように有名ではないのは、地勢のせいである。「物の陰僻に在るや、唯に是の湯の不遇なるのみならず」（『潜中紀略』二）という感を抱く。朝夕、自炊し独酌し、山を望み、川を眺め、閑静な事はこの上もなかった。故郷は僅か十五・六里しか離れていないのに、このように身を潜めているのは悲しく、秋の夜長に感じて、母の夢も見た。そこで、「鬼首より向町に至る、是を出羽と為す、是の歳三たび郷国に入るも、一も家郷に通ずることを得ず、感慨殆ど極まる、向町に止まること三日、星湯に留まること七日、秋夜の長きに苦しみ、夢に感じて其の実を記す」を詠じた。

夢中消息母公居　夢中の消息　母公の居
隠忍因人賜返書　隠忍　人に因りて　返書を賜ふ
遺憾未看夢先覚　遺憾なり　未だ看ざるに　夢先づ覚む
書中安否果何如　書中の安否　果して何如（いかん）

夢の中で母君のおられる家に便りを遣った。

母君はひそかに人をよこして返事を下さった。
惜しい事には、開いて見ないうちに夢が覚めてしまい、
書簡に安否がどう書いてあるのか知れぬ。

八郎のマザー・コンプレックスも相当のものである。
また、星の湯における感を詩に詠じた。

自酌自炊何等閑　自ら酌み　自ら炊ぐ　何ぞ等閑なる
非仙非樵漂山間　仙に非ず　樵に非ず　山間に漂ふ
人世歓苦知難測　人世の歓苦　測り難きを知る
物極必反天所観　物極まれば　必ず反る　天の観す所
枯木還華春暖日　枯木　還た華さく　春暖の日
三冬方耐霜雪寒　三冬　方に耐ふ　霜雪の寒きに

独りで酒を飲み、独り自炊して、なんとやりばなしなことか。
仙人でもなく木こりでもないのに山中をうろうろしている。
人の世の喜びと苦しみは予測しがたく、
物事は極まればかならず反転するとは、天がお示しになっている。

枯れ木が暖かい春になるとまた花開くのは、
冬の三ヶ月の厳しい霜や雪の寒さに耐えるからなのだ。

「物極まれば必ず反す」とは、『易経』を貫く哲理であるが、八郎はこの哲理を支えとすることに拠って、また明るい運が廻って来るのを期待しているのである。

六十　仙台到着、伊牟田尚平との再会

二日後の**九月二十八日**、安積五郎が戻って来た。万事うまく行って、路用なども整えてき、その上に郷里の様子もいろいろ分った。すなわち、

「**五月下旬**に八郎が江戸を脱走して後は、万一、国元にも来るかも知れないという事で、城下（鶴岡）から二人の監視役人がやって来て、今に至るまで生家の宅番を致しておる。生家でも、親類の者を江戸に上らせて様子を探ったところ、『水戸の浪士と共謀して叛逆を企てた』と幕府のお触れがまわっており、江戸ではその噂が一方ならず行われている。**八月頃**から、次第にその噂も行われなくなったが、幕府は、関八州は勿論、遠近残る所もなく捜索し、**七月中**、越後路に痕跡があったという事で、八丁堀の捕手の頭どもが二十二人、急いで下ったが、越後から国元の温海までの痕跡は分ったが、それから先は分らず、『近国に居るであろう』と、右の者たちは鶴岡まで来て、八郎の両親を呼び出し、領主の役人と一緒になって、厳しい尋問を行ったそうだ。しかし、両親も行方を知らないのだから、八丁堀の捕手たちは帰ったそうだ。およそ、この一件で逮捕された者は二十人余り、嵩春斎も捕えられ、ついに牢死したそうだ。容易な

らぬ厳しさで、一旦は、『両親を引き出して拷問すれば、当人が出頭しよう』などという声もあったそうだが、しかし、そこまでは行かなかった、という事である」

と言うのである。

このように教えてくれた懇意の者とは、以前から八郎が識りあっている商人で、諸所に旅している者である。八郎は、その親切に感謝した。商人は、丁度、どこか遠方へ旅に出る矢先に、五郎が訪れて行った、という事で、巡り合せが良かった。

星の湯に留ること七日（『潜中紀略』二）、と言うから、**九月三十日**の事であろう、

「然らば、この辺も危い」

と、八郎と五郎は岩手山（岩手県岩手郡）に出た。そこで泊って、酒を酌み交わして、これまでの憂さを晴らす。岩手山から新町に出て、また、そこで宿泊、かくて**十月七日**の夕方、仙台に到着した。まず戸津宗之進の屋敷を訪れたが、不在なので、国分町の宿に入る。夜になって、再び訪れてみると、天なるかな、伊牟田真風（尚平）も来ている。大いに驚き、また互いに無事な事を喜んだ。戸津氏が、

「兄（けい）たちの捜索は、ようやく弛んだが、やはり大いに警戒しなくてはならぬ。どうして、そう簡単に宿に入るのか。すみやかに宿を払われよ。この頃、水戸方面から捕手の者が来て、いろいろ騒しい最中であるから、万一、誤まつ事が無ければよいが。非常に気づかわしい」

と言うので、すぐさま宿に戻り、

「早朝に伊達郡に行く事になった」

と口実を設けて、**十月八日**の夜明け方に、戸津氏の屋敷に移った。宿では一向に怪しむ風もないので、一安心した。伊

牟田と三人で、枕を並べて寝て、朝になるのを待った。

六十一　安藤対馬守討伐への誘い

文久元年十月八日、朝、桜田敬助（景敬）も来った。お互いに無事なのを喜ぶ。伊牟田が言う。

「先度（**八月二十八日**）、水戸に帰ったところ、水戸の有志たちは、ことのほか窮迫しており、義挙（上京斬奸）の件も、『軍用金を求めておる』などと言って猶予している。時に、住谷寅之介から拙者の隠れ家まで急報があり、拙者を呼び出して言う、『この頃、江戸の有志（筆者注、大橋訥庵）から水戸まで申し述べてきた事によれば、近頃、閣老安藤対馬守信正が内密に和学講談所の塙二郎（塙保己一の四男）に命じて、天皇御譲位（廃帝）の先例を調査させている。二郎の忰は志ある者で、父を諫めたのだが、聞き入れられなかった。忰は憤って、有志の者にこの事を洩らしたところ、天下が等しく仰望する明天子を失い奉るなどいう事があっては、天地の大変だ、とも言い、是非とも安藤対馬守を討伐し、御譲位を差し止め申すべきである、とも言って、討伐の同志の者が十人現れたが、ただ今は五人しか残っていない。あと五、六人も、水戸の方から選んで、派遣してくれ、と言う事である。それに就き、拙者（伊牟田尚平）ほか二人の者（筆者注、平山兵助と児島強介）に頼む』と言うのである。拙者も、『御譲位を防ぐ事は、国家の補いにもなる事です』と承知致した。然るに、住谷はなおも、『清川と安積五郎がこの事を引き受けるよう勧めてくれないか。もし、清川の方からこの大事を引き受けるのを望むならば、願ってもないのだが。ともかく、ひとまず仙台に行き、清川たちに勧めてくれ。その内に、後から三、四人も仙台まで差し向けるから』と言う。かくて拙者は、**先月（九月）二十五日、六日**、水戸を発足、仙台に来ったが、兄らはその頃は南部に行った後なので、拙者は遠野までまかり越し、江

田大之進に面会致した。それから更に一の関（熊谷匱蔵方）へ尋ねて行ったが、兄らの行方は知れない。そこで仙台に戻り、桜田敬助殿から書状をもらって、再び熊谷匱蔵方にまかり越し、兄らが鬼首の方に赴いた事を聞き及び、仙台に戻って、兄らが今にも来ようかと待っておったが、昨**十月七日**になっても、一向に音信も無い。水戸の二人（筆者注、平山・児島）も、やって来ない。それ以前、水戸の方から奸悪な捕手どもが拙者の跡を付けて、仙台まで来たので、拙者も桜田敬助邸に居づらくなった。戸津殿が、『居所が知れた以上は、他家に潜もうとも、桜田邸に潜もうとも、いずれにしても迷惑が及ぶ事は避けられない。私の屋敷の方が桜田殿のそれよりも監視の目が緩やかだ。いっその事、私の屋敷に潜んでいた方が良かろう』と、他事にかこつけて召使いの者たちを悉く引き払って下さったので、昨夜（**十月七日夜**）から移っていたのだ。だが、水戸の方からの音信は無し、兄らも戻っては来ないし、城下では召捕の者の監視が厳しくはあるし、明日にも立ち去ろう、と決定したところに、兄らが偶ま来りあわせたのは、天の幸いである」

塙二郎の御譲位儀式取調べを契機として、水戸の住谷寅之介・原市之進（尚不愧斎）らが安藤信正斬殺を策動し、大橋訥庵も心ならずもそれに関わり、訥庵の宇都宮の門人児島強介と水戸藩士平山兵介が刺客に選ばれた事は、寺田剛著『大橋訥庵先生伝』一八八頁に述べられ、拙稿「大橋訥庵逮捕一件」（『幕末維新の文人と志士たち』百三十三頁）でもそれを補訂している。水戸では更に、たまたま水戸に来った伊牟田尚平に托し、彼が清川八郎・安積五郎を追って奥州に赴く際、この計を清川等に説き、賛同を求めしめた事を、寺田剛が『水戸藩史料』に拠って記しているが、八郎の右の記述は、この寺田剛の記述と一致しているのである。

八郎は、伊牟田の語る事情を聞き終わると、

「この頃は、桜田門の変があってより、諸侯の警戒は一通りではない。況んやまして、罪悪がつのっている閣老安対（安藤対馬守）などは、殊のほか警戒していて、一向に江戸から外にも出ないそうだ。また、警戒厳重な江戸に潜入する事さえ気遣わしい。殊に十人ばかりの小勢でもって討ち取る事など覚束ない。たとい、どのような妙策であっても、人のやった事をまねるのでは、志をとげ難いものだ。空しく命を落すだけで、国家にとって益は無い。それどころか、却って安対の奸計をつのらせるだけだ。その上、水戸の二人もやって来ないから、思い止まった方が宜しい」

と、細々と諌めた。伊牟田も、

「尤もだ。ほかにも良い策を考えてみよう」

と納得した。

一方、戸津宗之進と桜田敬助は、

「東禅寺を襲撃した水戸浪士の余党五、六人が、水戸にも潜みかねたと見えて、仙台を指して逃げて来たそうだが、相変らず水戸の者と公言して、やって来るという無謀さなので、当城下では、『水戸の浪士が来る』と、いろ〳〵警戒厳重となり、余党の者どもの内、二人までが召し捕えられ、他の者は所々に逃げ散った由。内密にして逃げて来るならば、それでも助かる工夫もあったのに。水戸の者と名のって来る故に役人たちも見逃しがたく、それぞれを召し捕えようと、方々探索する事になった。しかもまた、八郎・五郎の件に就いても、『先日来た者は表向きにではなく、内密にして探るように』と待ち構えておる。その最中に、またまた水戸の浪人どもの逃走の事が起り、併せて探索する気配となって来た」

と、両人ともに大層心配している。

右の八郎の反対意見を見ても分かるように、彼は、少人数による要人暗殺、という原初的な方法には飽くまでも反対なのであって、それよりも、次節に詳しく述べているように、天皇の認可を得た上で、薩摩藩という大藩を抱き込み、大人数でもって関東方面で尊王攘夷運動を行う、という雄大な構想を、この時点で抱いているのである。こうして、元治から慶応年間にかけて、薩長同盟を成立させた上で幕府の大政奉還を企図する、という坂本竜馬らが立てた構想の先駆的なもの、とも言うべき構想を考案している、という点で、八郎は勤皇倡始と言われるのであり、そこにこそ漢学を学んだ彼の知性が発揮されているのである。

六十二　八郎の尊王攘夷構想

八郎たちは、久しく潜伏している事もできかねるし、その上、水戸の方でも、徳川慶篤（よしあつ）は安対の奸計にたぶらかされて武田修理（耕雲齋）・岡田信濃守（徳至（のりよし））・大場景淑（かげよし）（一真齋）の三家老を斥け、奸吏を任じて、有志の者を排除しているものと見えて、安対を斬る刺客は、約束の日から七、八日も過ぎても、一向音信が無いので、

「今となっては、是非も無い、一洋夷・一奸吏を斬るよりは、三人とも一緒に上京し、安対らが御譲位を企てた経緯、および草莽に我が党のような義気が振い興っている事情、また国家内外の時勢などを詳細に記した封事を携えて、伊勢の神官山田大路陸奥守（おおじむつ）を訪れ、それを公卿中山忠能（ただやす）家から内密に孝明天皇の叡覧に入れ奉り、然る後に九州に下り、薩摩の同志を募り、屈強の士が十余人も集まったならば、甲斐から関東にかけて横行し、ひたすら義兵を募り、尊王攘夷を実行すれば、必ずや回天の偉業も成就するであろう。裕福な大名などは、とても頼むに足りない。自分から事を唱えるに如（し）かず。そうとすれば、獄中の同志をも機会を見て引き出し、再興することにしよう。もし京都の方の工作がうま

く行ったならば、勤王の詔を天下に下し、義兵を挙げよう」

と、皆々評議一決した。

六十三　庄内藩への憤懣

そこで、**十月九日**を出立の日と定めた。桜田敬助は、衣類と長脇差を用意してくれ、その上、路用も少々贈ってくれた。朋友の義を感じて、八郎も述懐の詩（『潜中紀事』一の「述懐詩五言古幷序」）と生家に伝来している河内守元行作の刀鍔で、百足の彫物が施してある物を敬助のもとに預け置くことにした。潜匿してこのかた、生家から持ち来った物としては外に無い品物ではあるが、特別の朋友であるし、また将来、身の安全も期し難いので、特に預け置いたのである。その他、弟熊三郎に遣わす書状も預け置いた。

八郎が江戸を脱走する際（**五月二十一日**）に弟熊三郎に託して庄内藩上屋敷の飛脚部屋に、著述・大小刀・書画法帖類などを三箇の箱にして届け置かせ、清川に転送するよう手配した物は、藩吏どもが幕府に気づかって、そのまま幕府に差し出していた（八郎が無礼者を斬殺した刀は、逃走の際、血腥いまま神田お玉が池の自宅土蔵の床下に隠し置いてあったが、それも幕吏に没収された。また、伊牟田尚平がヒュースケンを斬った刀も、右の三箇の箱と一緒に没収された。それらは後、文久三年正月、八郎が大赦に遇った時に八郎の手に返され、その後は清川の生家斎藤家に遺物として伝えられている、という。――八郎の長妹辰の長孫斎藤清明の注記。『潜中始末』）。

まことに頼りにならない上屋敷のやり方である。他の物は惜むに足らないが、著述の草稿だけは少々遺憾である。勿論、経書についての著述や文章は、以前に書いておいた草稿を郷里に遺しておいたから、いずれ後日現われる筈である

が、三百篇の古詩と『西遊草』『兵鑑』三十巻等は、ほかに草稿も無い物である。だから、「あまりにも情け無い藩邸のやり方である、後日、再興した時には、きっと…」と残念な思いをした。こうした無念さがあったので、わざ〳〵鍔は桜田敬助に預け置いたのである。もっとも、刀剣類は、それほど多く幕府の手に渡った訳ではない。だが大小刀併せて多分十二、三本ほど、その手に渡ったであろう。今になって思えば、以前、洋夷館焼打ち決行を取り決めた頃に、およそ七、八本の大小刀を同志の者に贈った事こそ、却って幸いであった。すべて藩邸の無情な事は、言うのも心外なほどであった。少しは八郎の臣子としての衷心を察して、憐れんでくれても良さそうなのに、むしろ今では幕府よりも、郷里における取り調べの方が厳しいそうで、余りにもひどいやり方だ、と恨まれるが、今さらどうしようもない。

六十四　仙台出発

八日の夕方、色々の準備もととのい、別れの杯を酌み、

「うまく運んだならば、すぐに報告致そう。さすれば、戦場で快く再会できよう」

と桜田敬助（八郎より二歳年長。三十五歳）などと約束していると、桜田老人（敬助の父良佐。六十四歳）がわざ〳〵戸津の邸に訪れて来て、色々の親切な言葉を掛けてくれ、乾糧（ほしいい）の餞（はなむけ）もあった。八郎は、以前、仙台に久しく滞在していた事があり、弟熊三郎や妾お蓮も桜田家と懇意にしていたので、老人は殊のほか歎息して、さめ〳〵と涙を流し、八郎も肝に銘じた。元来、八郎は、このたびの斬殺一件を老人には知らせない積りでいたが、敬助から委細に話したものと見えて、老人は大層心配してくれたのである。老人は壮健で、尊王攘夷の志は日々絶ゆる事も無く、伊牟田や安積五郎には当初、全く面識が無かったのであるが、八郎の同行者という事で、残る所なく世話してくれ、一同は感服したの

である。

戸津宗之進の方は、最近、懇意になったばかりなのに、あれこれ配慮してくれたのは、当世に得難い義勇の士というべきである。時節になれば、世上に現われ、抱懐する義憤を晴らすべき人物だが、敬助と同様、世に用いられていない事こそ悲しむべき事である。しかし、後日、尊王攘夷の義兵が出兵される時には、この両人は奥羽で第一の「倡始」（先駆）となるべき人物であって、その親切には感動し、大そう別れが惜しまれた。

八郎たちがもしも西国に奔っていたならば、このような情誼を結ぶ事にもならないで、ただ大いに心労するばかりであったろうが、天の賜物で東国に奔る事になり、このような義友と暫時ではあるが行動を共にする事ができ、後日の同盟を頼みおく事ができたのは、鬼神の然らしむる業であろうと、天地を拝して、お互いに祝賀しようというほどの思いがした。

十月九日、七つ頃（午前四時）に戸津家を立ったが、宗之進は勿論、桜田敬助も戸津家に泊っていたので、暁星の光のもとに笑いを交わして別れ去った。時に詩を詠じた。

非義必不期死　義に非ずんば　必ず死を期さず
不期死必惜身　死を期さずんば　必ず身を惜しまん
吾党同志死不易　吾が党の同志　死すること易からず
緩急託来俱相困　緩急　託し来りて　俱に相困しまん
奸吏追捕日急迫　奸吏の追捕　日(ひび)に急迫
義人擁護愈砕神　義人の擁護　愈よ神(こころ)を砕く

暫時分手三百里　暫時　手を分つ　三百里
約巻風雲払虜塵　風雲を巻きて虜塵を払はんことを約す

義に関わる事でなければ、必ず死ぬまい。
死なない以上は、絶対に身を大切にしよう。
我等が同志は、安易に死ぬことはないのだ。
危機の際でも支えあって、一緒に苦しむことにしよう。
悪役人の追跡は日々に迫っているが、
義侠心ある人がますます心を砕いて庇護してくれる。
暫し三百里のかなたに離れ離れになるが、
この私は、風雲を巻き起こして、夷狄どもを追い払うことを約束しよう。

六十五　飯坂温泉

仙台城下を出て十三里、白石の城下に着いた。まだ七つ過ぎ（午後四時頃）だが、宿泊する。

十日頃（以下、十一月一日に至るまで、八郎は日付を明記していないので、筆者の推測による大凡の日付を入れておく）。以前は、幕府の方でも、八郎と五郎の二人連れであると承知していたが、この度は伊牟田尚平とともに三人になったので、悪役人の目印も大きく変わり、気遣いも薄くなった。たやすく仙台領を出て、伊達（福島県伊達市）に至り、

飯坂温泉に廻って宿泊した。秋の葉はもはや落ちて、谷川の景が鮮やかである。

ここは、佐藤荘司の城跡で、荘司の菩提寺があり、荘司の先祖と継信・忠信の墓がある。八郎は、以前に見ているが、五郎と伊牟田尚平を誘い、雨を衝いてその寺に行き、宝物なども一覧した。その感想を詩に詠じる。

君克知臣臣知君　君は克く臣を知り　臣は君を知る
兄弟殉身又絶群　兄弟　身を殉ずること　又た絶群
忠義余芳感千載　忠義の余芳　千載を感ぜしめ
一馬弔祭動三軍　一馬の弔祭　三軍を動かす
九泉有霊其何云　九泉　霊有らば　其れ何とか云はん
斯伴三士訪旧墳　斯に三士を伴ひ　旧墳を訪ふ

主君義経はよく臣下のひととなりを知り、臣下の継信・忠信兄弟はよく主君義経の真価を知っている。
この兄弟が義経のために身を投げ出した様も、また群を抜く。
こうした忠義は千年後にも伝わって私を感動させ、
義経は愛馬を僧に賜って兄弟を弔い、その様は全軍を感激させた。
冥土の兄弟に霊があるならば、一体何と言うだろうか。（さぞ感激することだろう）
かくて私は、三人づれで、兄弟の古い墓を弔ったのだ。

第四句の「一馬弔祭」は、『平家物語』十一「継信最期」の記述に沿っており、八郎の日本古典への知識を窺わせるものである。また、第六句の「三士」は、正しくは「二士」とあるべき所であるが、今は『遺著』の本文に従っておく。とにかく、逃亡者として知人に裏切られる事の多い八郎は、古物語の内の主従の純粋誠実な関係に一方ならず打たれるのであろう。

六十六　日光街道

翌十一日頃は、宿に、

「伊勢神宮に詣でる」

と言って、福島に出、奥州街道を上った。八郎がよく往来していた所なので、色々にして顔を隠し、国元の人間などの往来に気遣いしたが、幸い何も怪しい事も無く、大田原宿から日光街道に入った。もはや関東の地であるが、格別に厳しい事も無い。今市から鹿沼に出、例の街道を太田宿までのぼった。

そこから左横に入って、利根川を越えて、深谷在の手斗村（手計村。現、埼玉県深谷市）に至り、伊牟田尚平を尾高長七郎（第三十三節参照。本稿、中）のもとに遣った。折悪しく留守である。これは、彼が在宿ならば、江戸の風声をも尋ねて、且つ旅費などをも乞おう、と思っての事である。

そこから、甲州身延山へ参詣に行くという事にして、栃木宿において、五郎と尚平に勧めて、法華宗の数珠を求めて、首に掛けさせた。誰が見ても身延山参詣と見えるので、安堵した。人がいない田圃に出てから、三人一緒に大いに哄笑したが、これ程までにして世を暗ます心底こそ、滑稽である。しかし、

「身の落魄がここまでに至るのは、実に天地の間に容れられない身の上だ」
と、笑いもし悲しみもするばかりである。
これ以前、五郎と二人だけの時には、五郎は一日中、黙っていて、まったく一言の話も無く、一向に同行の楽しみが無いばかりか、却って困った事どもが多かったが、尚平が同行者となってからは、道中も殊のほか賑やかになって、すこぶる心が慰むことである。
しかし、いずれもが俄かに商人の体裁になったので、以前は色々、無骨な所が出て困ったが、今はいずれも咄嗟の変化に慣れて、人に逢って言い逃れするにも、さほどの気遣いも無く、人から怪しまれる事も無くなった。
「これも苦難の身の上で修行したからだ」
と、四方山の話にしつつも、自分でも歎息するばかりである。
そこから、
「三峰山を越えよう」
と、寄居（埼玉県大里郡寄居町）の村に宿泊した。宿の主婦は、八郎たちを本当の身延山詣でと信じて、
「若い人が遠く本山を信じてやって来るとは、これも仏縁です」
と身延山への奉納賽銭を託し、宿坊の何某への書簡などを頼む。

六十七　三峰詣で

十四日頃、宿を立つ。近頃は米の値段が少し下がったので、人気（じんき）がすこし穏やかになったが、元来、艱苦の世界ゆえ

に、道中は殊のほか難儀である。

尚平が、

「身延山をありがたがる事も無い」

と、戯れに主婦の書簡を開くと、三分金が出てきた。そこで酒代にすることにし、

「天が我々の窮乏を憐れんで、一杯の酒代を下さったのだ。あの主婦も幸いな事だ。これを悪坊主に施すよりは、天下の志士に与えた方が、その功徳ははるかに大きい」

と言う。

秩父郡の山中に入ると、道は折れ曲がり、まことに険しい。尚平は本当に健脚で、後日、八州を横行する際に用いるべき者である。三峰山の麓に至ると、早くも日暮れである。坂が月光を蔽い隠し、木々が鬱蒼と茂っているので、燭をともして、山道を一里余り登り、夜五つ過ぎ（午後八時過ぎ）に三峰山上に至り、宿坊に泊った。日本武尊の東夷征伐の御垂迹ゆえ、夷狄征伐祈願のために登山したのである。春・夏の頃、参詣人が群集するので、寺は甚だ大きく立派である。今日はひっそりとしているが、それでもお香を上げに来た者が多少いる。神の御威光のお蔭だが、残念な事は祭祀が僧侶に属している。この神ばかりでなく、世の中が概ねそうだ。誠に嘆息される。山の上で空気が冷たく、疲労も極まったので、坊の冷酒を大杯であおり、したたか酔って寝た。

忝聞天孫過此地　　忝（かたじけな）く聞く　天孫　此の地を過（よぎ）り
鎮撫東夷定大義　　東夷を鎮撫して　大義を定むと
社下拝祝我等心　　社下に拝祝す　我らが心

無乃一箇適神意　乃ち一箇の神意に適するもの無からんや
神意固知今猶本　神意　固より知る　今猶ほ本のごときを
余光分明輝霊位　余光　分明に　霊位を輝かす

もったいなくも聞いている、日本武尊がこの地に至り、
東国の異民族を平定して、大和民族の統一を果たしたと。
我らは三峰社に拝して尊へ敬意をはらう。
そうすれば、何かしら神の御心にかなうものがあろう。
神は御心にもとより御存知であろう、現代が古と同様だ、という事を。
尊は、御威光ありありと社殿に祭られていらっしゃる。

ここで注目される事は、八郎たちが自分たちの攘夷運動を日本武尊の東征に通うものと見なしている事である。両者に共通性を見出すことは、意外に思われるのであるが、八郎たちはそれほどまでに攘夷運動に入れ込んでいた、という事であろう。

六十八　雁坂越え

十五日頃。この山から甲州へ間道がある、雁坂越といって八里の間、人家が無く、すこぶる深い山だ、という。しか

し、信州へ廻るのは遠廻りだというので、三峰山を立って、山間を二里行く。栃本（埼玉県秩父市栃本）という関所の村に至ったが、手形を持って来なかったため、関守の婦人が不平を起し、やむなく村民に頼み込み、関所を過ぎた。もはや四つ頃（午後十時頃）になり、これより八里は山中で心もとないので、ある民家に泊った。ひどい所で、塵や煤が席を埋めており、鬱鬱として過ごした。すべて、秩父の山中は、人気が荒く、食物は乏しく、旅にすこぶる難渋する所だ。もっとも、けわしい坂を開いて耕作し、その状態は他国の比ではない。まことに木こりや熊・狼の郷である。時至れば、豪傑も出るかも知れないから、探るのも良さそうだ。

ここで注意したいのは、八郎が決起の日に備えて、人材を物色している事である。貧しい土地だからこそ困難に耐える人物が出る、という眼をもって、風土を観察している事である。

十六日頃、早朝に宿舎を出る。すぐに上り坂となり、霜が大層冷え冷えとしている。雪道となり、人の足跡はほとんど無い。一足探りに行くばかりで、誤ると谷に落ちそうだ。二里ばかり行くと嶺のうえに富士山が見え、三人は思わず心がはずみ、疲れを忘れた。枯葉を集め、火を焚いて、食事する。そこから一里ばかり下ると、谷川となる。富士川の源に続いているという。谷川沿いに下ること、およそ四里ばかりにして、ようやく村に出、また半里ばかりにして、夕暮れに湯の平という、関所のある村に至る。関所では頗る見くびって詰問する。そこで、ひそかに嘆息する、

「天下を動かそうという志を抱きながら、時が来ないために、田舎の若造にぺこぺこする。人は状勢次第だ」

ここには温泉があるそうだが、行ってみない。宿舎の周りが大層汚いからである。ここから甲府へは七里という。

六十九　甲府の土橋鉞四郎

十七日頃、早朝に出発、一里ばかりで平野となり、富士山も見える。所々の村を過ぎ、川を渡り、甲府の手前の日本武尊の垂迹（神社）に立ち寄る。

七つ頃（午後四時頃）、甲府に宿泊する。

甲州は、四面皆山で、三、四里と七、八里に及ぶ平野もある。要するに、すこぶる狭隘の地で、守りに向き、働きかける所ではない。武田信玄の膽智が無ければ、どうして他に手を出すことができたろうか。

甲府は、盛んな街である。しかし、会津よりは狭少だ。城は街の南西にあり、古代風の山城ではない。往来する人も甚だ賑わっている。甚だ多い物が仏寺と石仏である。尚平は、これを

「信玄が仏教を好む弊害は、ここまで極まるか」

と罵ってやまない。

この甲州には、八郎たちの同志にも等しい山岡鉄太郎の組とも言うべき尊皇攘夷の仲間が頗る多く、頭取りの者が七、八人もいる。その中で剣術の同門（千葉周作門）である土橋鉞四郎という者がいる。今福村（巨摩郡）に家があるというので、

十八日頃、早朝に出発して、雨をしのいで、三里離れた今福村の森花瀬兵衛の家に至った。鉞四郎は、この家の後見人なのである。始めは八郎も、彼の顔を覚えていないほどであったが、会ってみると、おたがいに古い同門だ、という事が分かった。鉞四郎は、かねてから八郎たちが潜匿の身になったことを承知していたが、酒などを出してもてなす。

まず第一に、山岡鉄太郎の消息を尋ねると、

「六月中、八郎の斬殺一件の取り調べ（第十五節。上）以後、彼は暫し遠慮していたが、疑惑も晴れたためか、何の問題も無く、この頃は講武場へ出ている」

という事で、大いに安心した。右の件につき、この辺りの同志もまだ結束していないが、志は変わらない、という事である。

そこで、上京したいという事を細々相談すると、鉞四郎も大いに喜んでいる様子なので、今後の件（決起の件であろう）についても固く約束した。いい時機にさえなれば、よほど義兵も出せる、という事である。頗る安堵した。しかし、

「この辺りは甲府に近く、自分も人に知られている男で、なおさら人に注目されるだろうから、滞在は宜しくない」

と言う。尤もの事である。そこで、八郎は山岡に手紙を書き、自分たちのこれまでの消息を記し、さらに上京する予定まで述べた。

「先ずもって山岡さえ無事ならば、江戸の件（お蓮・熊三郎や捕縛された仲間の釈放）も、なお良いやり方も出てくるであろう」

と、いずれも大いに元気が出た。よって後の事を頼み、出立した。鉞四郎は、暫し見送ってくれた。節義のある士である。

国恃山河真可憂　国の山河を恃むは　真に憂ふべし
古来覆轍墜同流　古来　覆轍　同流に墜つ
人心不帰何所恃　人心　帰せざれば　何をか恃む所ぞ

恃乃士民恃乃子　乃(なんじ)の士民を恃み　乃の子を恃め
偶過是邦感旧時　偶ま是の邦に過(よ)ぎりて　旧時に感じ
且探義侠結微思　且つ義侠を探り　微思を結ぶ
山河歴々人空去　山河　歴々として　人は空しく去り
青史落落詳所処　青史　落落として　処する所を詳らかにす
乃知成敗非在天　乃ち知る　成敗は　天に在るに非ず
古来成敗只在人　古来　成敗は　只だ人に在りと

国が山河の険を頼みにするのは、本当に心配な事だ。
古より国がくつがえるのは、同様な弊害から来る。
人心が為政者に向かわなければ、何を頼みにできようや。
為政者は、その官吏と人民を我が子のように頼みにせよ。
私は、たまたまこの甲斐に来て、信玄公の古に感じ、
更に義侠の士を尋ねあてて、いささか同盟を結んだ。
古の英雄はもはやいないが、山河だけはありありと残り、
名は史書に大きく留まり、出処進退が詳しく記されている。
かくて明らかになる、成功と失敗は、天が決定するのではなくて、
古より成敗は、もっぱら人材に拠るのだ、という事が。

右の詩は、地勢に拠ってその国の戦力や防衛能力を推察し、もって将来の攘夷行動に備える、という八郎の思考方法に基づいて成ったもの、と言えよう。そうした思考方法は、既に第二十四節（中）「会津にて」においても見られたものであり、今後も持続的に見出されるであろう。ただし、彼はまた地勢を頼みとする事の危険をも指摘し、人心を収攬する大切さを強調する。その事も今後の彼の行動に影響を及ぼしていくであろう。

また、八郎は、鉞四郎に対して真っ先に山岡鉄舟の消息を尋ね、その無事なる事を知って安堵するのであるが、鉄舟こそ幕府の目付役として八郎たちの攘夷運動を監視していた者である事は、第十五節「山岡鉄舟は幕府の間者なり」で詳述した通りである。幕府の鉄舟への嫌疑がすぐに晴れたのも、彼が幕府から派遣されていたればこそ、そうなったのである。そうした事情に、智慧のある八郎がこの時になっても全く気づいていない、という点に、八郎のお人よしな処が現れている、と思うのである。素封家の長男である彼には、こうしたお坊ちゃん的な面が生涯存在していたのかも知れない。

七十　東海道へ

八郎たちは、当初は中仙道から行こうと考えていたが、和宮が丁度、降嫁のため下向し、道中で逢うことになりそうで、中仙道は面倒である。また、七、八月頃は幕府が大いに浪士や博徒を取締り、物情騒然としていたが、今はようやく穏やかになったので、東海道の方がかえって無事である、というので、東海道に決め、その日（**十九日頃**）は鰍沢（かじかざわ）（山梨県南巨摩郡鰍沢町）に泊った。

翌**二十日頃**、富士川を舟で下る。船賃は至って安い。駿河の岩淵まで十六、七里の場所である。岸は切り立ち、瀬の

急なことは、言語に絶す。これまで経験したことのない急流で、景色も良い。身延山（山梨県身延町）の傍らを過ぎると、堂の天辺なども見える。至って形勢の良い土地である。

「後日、立ち寄る時もあるかも知れぬ」

と笑いあった。七つ頃（午後四時頃）、岩淵（静岡県庵原郡富士川町岩淵）に舟が着いた。陸に上がり、蒲原まで歩むと、村の外に無礼な宿引きどもがいて、伊牟田が憤然と怒りを発した。やっとの事でなだめる。というのは、我々が田舎風の格好であるのを侮って、色々無礼な事を言い、あまつさえ礫（つぶて）などを投げつけたからである。逃亡中には、かような奇談が非常に多い。身なりが変わって、もっぱら田舎者の風をよそおっているので、人を見る眼の無い者どもが、本当に田舎者がお伊勢参りするのだと思い込み、色々の難題をふっかけるからである。

「今のありさまでは、しかたがない」

と、胸を撫でるばかりである。時を得れば、そばにも寄れない身分になるのに、今の成り行きこそ哀れである。その日は由井（庵原郡由井町）に泊った。

七十一　和宮の車荷

二十一日頃、駿府の手前で和宮様のお車荷に遭う。およそ九十個あまり、大きな物は道を通れず、橋を造り変え、狭い道は開き、通行の難儀は言いようがない。毎日、民間から人夫を出させ、四方の村村は喧しい。最後の所が最も大変なのだ、という。

薩陀峠を過ぎる頃は、まだ夜が明けていない。府中では、佐賀侯の参府（江戸行き）に遭う。頗る少人数である。世

間の意表を衝くという計略なのであろう。ずる賢い事は笑うべきである。

宇津の屋峠を越える。和宮のお車が通るというので、山を開き、普請（工事）の痕がおびただしい。その日は藤枝に泊る。

二十二日頃、意外に東海道の宿改めは緩んでいて、春の厳重さとは雲泥の違いだ。和宮様の御縁組（将軍家茂との結婚）のため、少々緩んでいるのであろうか。大井川の閑道の橋を渡って、相良に出、横須賀（静岡県掛川市横須賀）の手前の村に宿る。この辺は大層暖かく、我が清川の八月下旬とも言えるほどだ。

二十三日頃、横須賀から見付に出、天竜川を越えて、三方が原海道の様子を探り、三方が原（浜松市北区三方原町）を過ぎて、気賀（きが）の関の手前の村に泊る。三方が原（武田信玄と徳川家康が戦い、家康が敗走した所）の風景に懐古の思いを抱いた。

二十四日頃、早朝、気賀の関を通過する。名前を申して、通すだけだが、至って固めの厳重な所である。三里ばかりで遠江と三河の境の山（鳳来寺山）に至る。東は遠州を一覧し、右は三河の今切の湾より遠州一円が眼下に収まり、三河は西に見渡し、素晴らしい景色が旅魂を慰めてくれる。往来する者が稀なので、寂寥としてはいるが、一視万金に値する景だ。

豊川稲荷社（愛知県豊川市豊川町）に参拝し、攘夷の御神籤（おみくじ）を探る。大吉の御託宣を得て、一同元気づいた。その言葉に言う。

鑿石方逢玉　石を鑿って　方に玉に逢ふ
淘沙始見金　沙を淘（よ）りて　始めて金を見る

青霄終有路　青霄　終に路有り
只恐不堅心　只だ恐る　堅心ならざるを

石を削ってこそ、玉を見出し、
砂をより分けてこそ、金を見つけられるのだ。
青空になり、路も開ける。
ただ意志が堅固でないのを恐れる。

今の我々にぴったりで、前途に希望あり、と言えよう。赤坂（豊川市赤坂町）に至って泊った。

十月二十九日頃、早朝に出発し、疲労に耐えて、熱田に至りて宿泊する。

十一月一日（八郎の明記する日付。十月二十四日頃から突如飛躍するが、前述した理由に拠るものとして諒恕されたい）、早朝に熱田大神宮に参拝し、尊皇攘夷祈願の神楽を奏上した。詩を作る。

吁赫神霊輝日東　吁（ああ）　赫たる神霊　日東に輝く
雄威千万鎮諸戎　雄威　千万　諸戎を鎮む
縦教後嗣居憂労　縦ひ後嗣をして憂労に居らしむるとも
終殲姦回及不窮　終に姦回を殲（ほろ）ぼして　不窮に及ばん

ああ、神の霊が明らかに日本に輝き、
その雄々しい威力は数限りなく、多くの夷狄を平定なさろう。
たとい我等子孫を苦労させようとも、
最後には邪悪な夷狄を滅ぼして、永遠に日本を存続させよう。

姦回は、『書経』泰誓下に見える語で、よこしまの意。決して豊かではない旅費を割いてまでして神楽を頼み、攘夷を祈願する所に、八郎たちの攘夷思想が飽くまでも固いものであることが見てとれる。

七十二　大薩和尚への失望

十一月一日、名古屋に行った。大光院にいる大薩は、もとは雲水であって、小僧の時分に清川に来たり、八郎の父などが面倒をみて、菩提寺の住職としてやり、八郎の家が檀家頭であった、という間柄であるから、八郎は、尚平に書状を持たせて、大薩に会わせ、旅費を乞わせた。暫くして尚平は戻って来て、

「大薩に面会したところ、大層応対が良くて、『以前から八郎殿たちの消息は承知していて、あれこれ案じていたところ、幸いにもお越し下され、大喜びです。お手紙の返事は、こちらから出しましょう』との事でした」

と報告する。この事は、尚平から「他の事にかこつけて適当に作り事して、外に洩らさぬよう」に言い含めた、との事である。

「大薩も心中に了解したようだし、また書状にも説きつくしたのだから、きっと良い返事が来るだろう」

と、熱田に帰り、桔梗屋に泊まった。

二日になっても、終に返事が来ない。

「和尚は返事をやる積もりであっても、左右の僧どもに止められたのか。和尚は一向に驚いている様子も無かったのだが、到頭来ないのは致し方ない。僧侶などは頼むにたりない者だ」

と、尚平が慨嘆する。

「余人はともかくも、こちらは菩提寺の檀家筆頭であるし、彼が雲水の時から面倒みたのに、このような時になると、一向に素知らぬ顔するのこそ、凡俗の最たる者だ。彼がどれほど出世したとて、このような心であるならば、取るにたりない者だ」

と呆れるばかりだった。

「きっと幕府から手入れがあったために、後日の禍を恐れたのであろう。人心頼みがたく、憐れむべき者だ。後日、私が出世したならば、彼は何の面目があろうや」

と、期待はずれの事ばかりだった。

大光院は、名古屋市中区大須に現存し、徳川家康の第四子松平忠吉が慶長八年（一六〇三）、清洲に建てた興国山濟善寺が前身で、忠吉が亡くなった慶長十二年に、その院号を取って大光院と改め、同十五年に現在地へ移された、という。さすれば、相当な名刹であり、その住職とあれば、宗教界においてはかなりの有力者であったろう。さればこそ、八郎は、期待を込めて伊牟田を遣わしたのであり、期待が大きかっただけに落胆もまた大きかったのであろう。

七十三　山田大路陸奥守の厚遇

朝舟に乗ると、同じ舟に薩摩人十余名も乗っており、その中に伊牟田の顔見しりもおる、という事で、万一、伊牟田を見つけるのではないかと、一方ならず心配した。七里の間、伊牟田は顔を隠し、八郎はひたすら彼等の様子を窺っていたが、一向に気がつかないようだ。しかし、時々、伊牟田の頭上に棹が横ざまに寄って来て、ほとほと心配した。だが、無事に桑名に到着した。桑名から蛤名物の茶店に出て、宿泊した。

三日、早朝に出発して、追分町から左折して伊勢路に入った。時は既に寒冷だし、また近年は夷狄のため物価が高騰したので、参宮人の姿が一向に見えない。今年が最も高いと言う。気遣わしさが少し緩んだ。津の城下に宿泊する。

四日、山田に到着した。まず外宮の旅亭に宿を取り、その伝手により、まず尚平をして書簡を御師の山田陸奥守親彦（ちかひこ）に贈り、面会を請わせた。よい返事があって、

「明日の午後に来られたし」

という事である。まず安堵した。

五日朝、身を清める。この日から前髪を蓄えだして総髪に戻す事にし、内宮に参拝した。八郎は、これで三度目、伊牟田は二度目だが、安積五郎は初めてである。此の度は尚更、一心不乱に尊皇攘夷と武運のほどを祈った。詩を作る。

謹告天神草莽臣　謹んで天神に告ぐ　草莽の臣
大倭名義誤姦人　大倭の名義　姦人に誤まらる

聖明在上所民望　聖明　上に在り　民の望む所
願復皇威率土浜　願はくは皇威を復さん　率土の浜

草莽の臣たる私は、謹んで天の神に告げ奉る。
大大和の主体性は、姦悪の幕吏によって辱められた、
御聡明な天皇が権を執られる事をば民衆は望んでいる、
どうかして帝の威権を国の隅々まで、また興したいものだ、と。

宿に帰り、昼食を取る。伊牟田はすぐに山田の家に行く。

親彦の家は、もと薩摩国の神主であり、現在は外宮の二、三番目の頭である。伊牟田が知りあいであって、田中河内介と親しい者だ、という。また、中山（忠能）家と縁戚であり、年齢は四十余り（文化十二年生まれで、正確には四十七歳）、歌道の達者で、皇国学にも詳しい、という。弁舌が立ち、品格も良く、前の薩摩侯（斉彬）に大層寵愛されていたそうだ。

八郎と安積五郎は、外宮に参拝してから、親彦の家に行った。親彦は、大層親切にして、酒などもてなしてくれる。いろいろ議論を交わしたが、結局、八郎たちとは意見が合わなかった。彼の意見は、

「当世をこのままに維持し、公武和合をもっぱら実現し、齋宮の制度を再興し、文武の学校を山田に開き、人才を取り立て、自然と尊皇に風化する」

という趣旨で、全く今の時勢に暗いというのではないが、要するに平和を主とする、という方である。しかし、八郎た

ちの志にひたすら感服し、いろいろの話があった。神主仲間は彼を狂猥（風変わりで頑固）と評しているそうだが、温和誠実で人を愛して、八郎たちをも兄弟のように扱う。公家とも親しくしているから、上書の件を相談すると、

「まず京に行って、田中河内介に頼んでみると良いだろう」

という事である。その日はこれまでにして、宿に帰った。

六日朝、また親彦の家に行き、麦などを馳走され、話に時を過ごした。別れを惜しみ、八郎たちの身の上を気遣ってくれ、

「今後の諸君の武運長久を祈る」

と言ってくれ、また

「諸君などは、たといどうあれ、実に無封土侯（領地の無い大名。諸国を自由自在に横行できる者の意か）である、とも言えよう」

などと言って、笑った。

八郎たちが辞去する時には、重代の古鏡二面を与え、暫く玄関に立って、長い間、跡を見送ってくれた。このような落魄した時には、懇意の者さえも避けがちであるのに、格別に大切に扱ってくれた事こそ感じ入る。議論の相違はともかくも、後日きっと頼みになるべき人物で、伊勢のみならず、近国で随一の志ある人である。

その日は松坂まで戻って宿泊した。

大川周明の『清河八郎』九十四頁の後には、八郎が母に宛てた書簡の書影が掲げられている。それは、

このかがみは、伊勢の御炊大夫にて、薩州侯の神主なる山田大路陸奥守親彦と申、まれなる有志の人の家に永く伝

る二面のうちなりしに、余の志に感じてあたゑられし殊更の品なれば、少子のかたみと思取、御側にさしおき侍る
よふ、ねがひ申上候。

と読むことができ、『潜中始末』などには記されていないが、八郎がこの時、鏡を貰った事が確認できるのである。

七十四　伊賀上野から笠置山へ

十一月七日朝、月本から伊賀路に入り、阿波山田も過ぎて、上野の町に到る。荒木又右衛門の復讐場と言われている茶店で休む。今もなお賑わっており、主人が言う。

「又右衛門の仇討の月日と時刻は、酉年の十一月七日の辰の刻（午前八時）で、ちょうどお客さんたちの来られた日時と同じです。不思議な事です」

そこで、名物の鰯を肴に一杯やって、彼らの霊を祀った。

「匹夫の復讐でさえ、天下後世に伝わるのだから、まして天下のために復讐すれば、猶更だ」

と笑ったことだった。

それから笠置山に到り、後醍醐天皇の行在を探った。笠置山の頂に在るという。この山は、天武天皇の垂迹で、大石が大層多い。大石の上が行在で、楠正成もここで初めて謁見を賜った、という。至極狭隘な山頂で、六、七軒、百姓家があり、川を眼下に望み、景色は良いが、とても長持ちしそうもない地である。その当時には逆賊に迫られて、やむなく暫時の行在として定めたものであろう。幸い稲荷の祭礼があり、百姓や子供が集まっているので、赤飯などを無心して、食べた。山下の八町東に飛鳥某とかいう村があり、その当時、逆賊（行在を攻撃した陶山・小宮山）の道案内をし

て帝坐を陥れた者の子孫が住む村、というので、今に至るも四隣の村はこれを賤しんで交際しようとしない、という。順逆の戒めが小民にまで及んでいることは、頼もしいことである。

『潜中始末』では、「彼深山小宮山などの案内せし村」とあるが、『太平記』巻三「笠置軍事　付陶山・小宮山夜討事」では、行在を攻撃する先鋒の者を「陶山・小宮山」と記しており、『始末』の「深山」という表記は、「陶山」の誤りであろう。また、『太平記』では、陶山・小宮山を嚮導した村民の事は述べられていないのであるが、八郎は土地の伝説か何かに基づいて、この事を記しているのであろう。

それはともかく、ここで八郎は詩を作っている。

九重神器盗侵之　九重の神器　盗之を侵し
笠置山中汚六師　笠置山中　六師を汚す
一夜忽夢南柯事　一夜　忽ち夢む　南柯の事
回天名義起斯時　回天の名義　斯の時に起る

九重の宮中の神器を逆賊足利氏が奪い、
笠置山で行在の軍を攻撃した。
後醍醐帝は、ある夜、大樹の南を指した枝を夢に見られ、
その時より南朝を復興するという名分が実現した。

やはり『太平記』三「主上御夢事」の有名な故事を踏まえた詩であるが、八郎は勿論、楠正成の回天の事業を自分たちの尊皇攘夷行動に重ねあわせて、自らを鼓舞しているのである。

七十五　入　京

それから八郎たちは、川岸を下り、奈良の手前の村に宿泊した。

翌**八日**、奈良に到着、般若寺に参詣し、大塔宮護良親王が櫃に敵を避けた故事（『太平記』五「大塔宮熊野落事」）を思い出し、

「時運が開けなければ、親王でもそうなのだから、まして一介の民たる我等が千辛万苦するのは辞する所ではない。ひたすら堅忍不抜で、終始一貫するばかりだ。成功するか否かは、天の決める事で、我等の知る所ではない」

と、決意を新たにした。それから春日大社に参詣した。

奈良から宇治に至り、菊屋に泊り、川に臨んで酒杯を挙げる。安政二年（一八五五）の夏、母を奉じて西遊した際にこの楼に泊った事が思い出され、慈顔が眼前に浮かぶ。源平の宇治川合戦を想起するばかりではない。

十一月九日、伏見の側を過ぎ、黄檗寺に立ち寄り、京都に入る。五条橋の側で食事をし、雨も降ってきたので、

「ひとまず宿を取り、それから田中河内介を尋ねよう」

と、三条の川辺の某屋に宿る。奥州を出て、恙無く入京できたことを共に祝い、杯を傾け、十分に酔いを尽した。

七十六　田中河内介

『潜中始末』は、巻之二に入る。

田中河内介（名は綏猷、字は士徳、四十七歳）は、但馬国出石郡の出身で、権大納言中山忠能（ただやす）家の侍であり、中山家が天下に鳴るのは彼の助力による所が大きい、という。しかし、忠能卿は器が小さくて彼を用いることができず、そのために仕えをやめ、処士となっている。義気をもって京都に名高く、薩摩の士が多くこれと交わり、ことに有馬太郎とは非常に親しく、伊牟田も久しく交りを結んでいる。

十日、かように中山家との繋がりがあるので、自分たちの志を伝える機会もあろうかと思い、まず西村氏を介して、雨をしのいで、二条丸太町の川岸の家を訪れた。倅（通称は左馬介、名は嘉猷、十八歳）が出て、

「主人は摂津の方に行き、留守です。明日中に戻りましょう」

と言う。

「しからば、また」

と、宿に帰った。その日も逗留するので、宿は八郎たちの身元調べをしたが、江戸から京に来たというので、案外に手軽な調べであった。伊牟田尚平は、安積五郎を伴って、見物に出かけたが、八郎は宿に残る。

夕方、八郎は、尚平とともに河内介を再訪した。幸いに彼は帰宅していた。四方山話をしてみるが、一向にはっきりとせず、こちらをどのような者かと観察しているようだ。とにかく、宿を移そうと、

十一日、三条の宿を払い、伏見に行くような振りをして、ひそかに河内介の家に行き、倅を案内として、二条鴨川東

の刀屋七兵衛という旅館に行く。河内介の馴染みで、比叡山の僧の宿る所という。八郎たちは、大して気を使わずにすみ、やはり関東の百姓として泊る事にした。その夜も河内介の家に行き、話してみたが、いろいろ来客があって、しみじみと語れず、宿に帰った。

ところが、宿の主人は、八郎たちの内情を胸中に察してくれようとはせず、そうあるのが当然だ、と思っているためか、宿行司の方から色々に尋ねて来た。というのは、この宿は元来、僧侶だけが泊る所なのに、八郎たちが

「関東の下総、滑川（なめかわ）（千葉県成田市滑川）の百姓三人です」

という事にして泊っており、関東の者が泊るべき所ではないから、宿の行司方より、またまた尋ねてきたのである。町年寄および宿の知り合いにまで仔細に尋ねるので、尚平が思わず偽って、

「林部善太左衛門（上毛国岩鼻代官などを歴任した有名な代官）の百姓です」と言ったので、今となっては仕方なく、

「住所は江戸の市ヶ谷です」

と、適当につくろっておいた。しかし、後に聞けば、

「あの者たちの知り合いは、やはり田中河内介です」

と、宿から申し出た由。とすれば、元来、役人どもから疑われている河内介の家を訪れた事といい、また、林部善太左衛門などと世に有名な代官の名前を出した事といい、万一、取り調べられた時には、たちまち身元が露顕するだろうから、河内介に相談した上で、宿の主人を河内介の家に招き、良いやり方を尋ねた。河内介は、

「案ずることもあるまい。また訪ねて来たら、『あの者たちは出立いたしました』と言っておけば良い」

と答える。河内介が前以て内情を知らせてくれていたならば、問題も無かったろうに、何も処置が無かったので、宿は従来通りの取り調べにするようにしたのだ。八郎たちも、気味悪いので、

「こうなったからには出立した方が良い」
と決め、十二日、早速、宿には
「金毘羅様に詣でます」
と言って、出立した。元来、京都は、ことのほか旅人が多く、春などは言いようが無いほどだという。近頃は少しく穏やかではあるが、縁もない所に関東者が泊るために、色々の取り調べがあって、「旅人の行く先を宿から尋問すべし」と定められたそうだが、宿の主人が承知ならば尋問しない、という事に定まったそうである。
「つまらぬ心配をした」
と、それから河内介の家に密かに移った。
河内介に委細の事情を話し、孝明天皇の叡覧に入れようとしている上書の件も打ち明ける。河内介は、
「どうにでもできる」
と、請け合う。ただし、
「中山忠能公は、思いのほか平和愛好者であり、この頃は和宮様のお供で、江戸に下っている。拙者も先年から忠能公とは不和になり、退職いたしておる。だが、忠能公の嫡子の中将公（忠愛）は、父親にまさる大器量人で、今上（孝明天皇）のお側を務め、青蓮院宮（朝彦親王）などとも最も御懇意に遊ばされておられるが、それが父親の気に入らぬというので、近頃は病と称して引きこもっておられる由。このお方は、まことに英才で、拙者を殊のほか贔屓して、何でも言う事を聞いて下さる。じゃによって、九州の義士も、しばしば謁見を乞うてくる」
と、忠能公とは行き違っている状態である。八郎が、
「老中安藤対馬守は、今上を譲位させる姦計を抱き、塙二郎に命じて御譲位・廃帝の先例や儀式を調査させておりま

す」

と語ると、河内介は、

「初めて知った」

と大いに憂慮する。八郎は、ここぞと、

「大丈夫が天下のために尊皇攘夷の企てを立てるのに、どうして些細な事にこだわっておられましょうか。義にかなう事ならば、権謀によって同盟を結ぶのも厭ってはおられませぬ。当今は天下の者皆が反乱を考えていますが、あえて決行しないのは、命令を授ける方がおられないからです。今、青蓮院宮は相国寺に幽閉されておりますが、天下は皆、その英明を戴くことを願っております。そこで、宮の密旨であると偽って、天下の志ある者を募り、以って姦を斬り、夷を攘わば、事は必ず成ります。という事であれば、我々は速やかに九州に行き、その国々の志士を率い来り、それから明年三月を期して、宮を征夷大将軍とし、第一に京都所司代酒井若狭守忠義（ただあき）を討って、幕府の度肝を抜き、攘夷の義旗を掲げたいものです」

と説く。

八郎は、更にその権謀策として、

「私があらかじめ宮の御令旨を作って、九州の義士を呼び寄せる事に致しましょう。まず、その御令旨という物を忠愛公に見せ、公の御了解を得て後、宮から忠愛公に与えた物という事にして義士に示します」

というものを提案した。

今までためらっていた河内介は、じっと考えた後、

「よし。それで行こう」

と決断を下した。

十三日ないしは**十四日**、河内介は、忠愛公に会い、公に通じている薩摩の志士七名を招く書状を書くよう依頼した。これは公が自身にお書きになった。河内介もまた、当春、九州を遊覧した折に内々同盟を結んでおいた七人に書状を書いた。その七人とは、肥後の松村大成・大野鉄之助・川上玄齋、豊後岡の小河（おがわ）八右衛門、薩摩の美玉三平・是枝柳右衛門などである。八郎は、仙台の桜田敬助と戸津宗之進、水戸の住谷寅之介、甲斐の土橋鉞四郎、江戸の山岡鉄舟などにも書状を書いた。それらはすべて、他の事に托し、他人が見ては一向に分らないようにして、「近いうちに青蓮院宮の令旨を得て、義兵を擧げる故、機をのがさず相応ずるよう」勧めたものである。伊牟田にも水戸に向けて書状を書かせ、すべて**十四日夜**に飛脚店に差し遣わした。そして、別杯を酌み交わした。河内介に留める詩を作る。

大義誓天地　大義　天地に誓ふ
致身攘醜夷　身を致して　醜夷を攘はんと
赤心有所徹　赤心　徹する所有り
機会乃相知　機会　乃ち相知らん

大義を実現することを天地に誓う。
身を投げ出して夷狄を追い払おうと。
この真心は徹底しておる。
その時が来れば、知られよう。

七十七　九州へ

十一月十五日、未明に九州に向けて旅立つ。以前に倍して意気は盛んなものがあり、

「この旅で九州の同志を動かさずんば、どうして丈夫と言えようか。事成らば、回天の大業は、誰にも譲る所はない。風雲の変化は、実にこの行に在り」と勇躍して、出発した。

雨が降っている。

「この雨は、露（天子の恩沢）を万里（天下）に施す事になる吉兆だ」

などと言いながら、東洞院通りを進み、東寺に出て、淀川に至り、川を渡って、石清水八幡宮に参拝する。幸い十五日の縁日に当たるので、尊皇攘夷と武運のほどを祈る。

「草莽の臣それがしら、敢えて大義を企つるは、誠に国辱に忍びざればなり。願わくは神よ、威霊を垂れ、この行をして成就する所あらしめたまえ」

橋本村（綴喜郡八幡町橋本）に下る。そこから夜舟に乗り、午後八時頃、纜を解く。

この後の部分で『潜中紀略』にだけ、「真風（尚平）大いに怒る所有り矣」という記述がある。どのような事情を言うのか不明である。

十六日朝、無事に大坂に着いた。船の事を心配していたが、幸い常安橋のあたりで、今日出船する予定の小倉船を予約できた。だが、今日は出ないというので、五郎を誘って買い物に出かけ、城のあたりを見物して、夕方、船に戻った。

十七日、その日も風が悪く、天保山の手前あたりに停泊している。

十八日、大坂港を出て、和田崎あたりまで来る。しかし、風が悪く、処処に休み、播州に二日滞留、芸州御垂井（広島県呉市豊町御手洗か）に二日滞留、上の関にも滞留し、**二十二日**、ようやく赤間が関（下関）に至り、初めて上陸する。

この船の乗り合い客は二十人あまりで、八郎たちは、一番後から乗ったゆえ、帆柱のあたりに居て、寒いばかりか、煩わしい事が多かった（尚平が激怒したというのは、このあたりの事情に基づこうか）。乗合は、いずれも久留米の足軽風の者で、あとは僧侶が四、五人いる。八郎たちも町人風にしているが、もはや陸から遠く離れ、またこの海路は何度も通って景色を見慣れているので、暇つぶしに詩歌を吟じたり、また「回天封事」を草し、「述懐詩叙」を書いていたりすると、風体に似合わぬ者ども、と怪しむのか、いずれもが八郎たちを大層恐れる。しかし、皆、観察眼が鋭くない好人物ばかりであるから、危険な事も無く、安堵した。後日、八郎たちのことを色々噂するのだろう、と思われた。

七十八　白石正一郎

二十七日、赤間が関では、白石正一郎（五十歳）といって、かねて伊牟田が懇意にしている町役人のもとを訪れた。河内介から主人兄弟に渡す書状を託されている。弟は、近頃、薩摩に出入り御免の許可を得るために入ったという事で、留守である。正一郎は、この時、衰えている感じで、格別の気力も見せない。八郎たちを一泊させてくれ、色々議論もしたが、結局は町人根性で、大計に暗く、自分の利を計るばかりで、取るに足らない。だが、あながち見捨てるような者でもなく、時にとっては役にも立ちそうである。害は無いようであるから、尚平から八郎が逃亡している事情や義挙

の計画などを薄々話すと、計画に対しては異議もあるようだが、まず同意の風である。

二十八日、朝、出立の時、尚平の口から、

「路用を一両戴けぬか」

と言わせた。元来、豪商（海陸運送業）なのだから、うまくいけば、万事を託し、衣服も頼むはずであったが、こちらの逃亡の事情を知ったので、思いのほかに頼みにならない。それどころか、早く立ち去ってくれ、という気配さえ見える。ただ害にならないというだけで、畢竟頼むに足りない町人根性の男であった。長州などの下級武士が盛んに活動している様子などを糺した上で、立ち去った。

白石正一郎は、長州の奇兵隊や高杉晋作らの志士を援助した等の理由によって、後世からは評判の良い人物であるが、八郎は、旅費がもらえなかったせいもあって、あまり評価していない。

七十九　松村大成

そこから大浦（福岡県北九州市八幡西区大浦）に渡る。小倉町（北九州市小倉）を過ぎて二里ばかり来り、黒崎（北九州市八幡西区黒崎）の手前の野村に宿る。雪に遭った。

二十九日、黒崎を越え、十二里進んで、夜に入って内野町（福岡県飯塚市内野）に至る。

十二月一日、安積五郎は足弱なので、疲労が極まった。しかし、来三月前には義旗を挙げたく、あまり余裕も無いので、殊に急いだ。五郎は一向に進むことができないので、

「後からゆっくり来なさい。松村大成の家で会おう」
と、松崎村（福岡県小郡市松崎）から五郎を後に残し、十五里進んで、瀬高（福岡県みやま市瀬高町）に泊った。
十二月二日、高瀬（熊本県玉名市高瀬）南の安楽寺村字下村で松村大成の家を訪れた。大成は、肥後藩の上大夫である有吉某（将監）の臣であり、医を業とし、豪富をもって遠近に鳴り響いている。父子ともに義を抱き、かねてより田中河内介と同盟を結び、機会あらば協力せんとしておる。しかし、八郎たちは、ただその名を聞いているだけで、その心底如何を知らないから、まず八郎と五郎は、取次所で、
「江戸で詩文を学んでいる書生ですが、諸国を廻っております」
と名乗り、尚平は、
「仙台の書生です」
と偽り名乗った。大成の心底が知れたら、実を明かそうというのである。
幸い大成（五十四歳）は、取次所にいた。八郎がそれとなく色々の時事評を語ると、彼も心ある者と見え、八郎たちを奥の部屋に通した。子息の深蔵（二十五歳）も出てくる。いよいよ心底が見えたので、河内介の書状を差出し、実を明かした。父子は驚いたり、喜んだりした。大成が言う。
「まことに身に余り、忝い。今春、河内介が到来してより、油断なく同志を募っておる。また、筑前の浪士平野二郎（諱は国臣）という者は、元来、河内介も面会した者であって、以前、月照を京都から薩摩に送る時（安政五年十月）、筑前から西郷などと一緒に薩摩入りして以後、亡命の身となり、白石正一郎方に久しく潜居していたが、白石があの通りの俗物ゆえ、到頭世話が行き届かない。去年からは拙者の許に潜んでいて、専ら諸同士と談合しておる。その中に久留米の水天宮の神主真木和泉守（四十九歳）は、有馬随一の人物であり、十年余り弟の大鳥居敬太（水田の神官）の家

に蟄居しているが、その志はますます盛んであり、且つ学問もある、名高き者である。今度、薩摩藩の主（藩主は島津茂久だが、実権は父久光が握っているので、久光を言う）のために十得十失の論（後出の『神速説』を言うのであろう）を著し、義兵を挙げるよう勧め、義兵が挙げかねる時には、天下の浪人を集め、時機を待つべき事を勧める、という策を定め、それを携えて平野二郎は薩摩に入る積もりで、同行の者を伴って和泉守の所に行ったが、一両日中に帰るであろう、と待っておる処に、諸君がやって来られたのだ。これまた幸甚の至りじゃ」

「その平野二郎というのは、かねてから聞いておる人物です。幸いの事です」

と、八郎たちは、大喜びした。

その夜、大成から熊本の同志川上彦齋のもとへ飛脚をやって、参集するよう促した。もっとも、田舎で、人目に立たない所だから、できるのである。

八十　平野国臣・伊牟田尚平との離別

十二月三日、平野二郎（三十四歳）が偶然に大成の家に戻って来た。大成が、八郎たちの至った事情を仔細に語ると、二郎も非常に喜んで、

「薩摩へ伴おうと思っていた者は、埒があかぬ者ゆえ、独りで入薩しようと決心していたところ、幸い諸君が来てくれたのは天の助けだ」

と言う。その人物はなかなか沈着で、志操もしっかりしているので、八郎たちも隔意なく談じた。二郎は、

「さようならば、和泉守を内密に招いて、熟談致そう」

と言う。

幸い都合の良い飛脚があったので、二郎が委細を書いて、

「内密に来会されたし」

と、和泉守に申し遣わした。

この平野の書状は、『潜中始末』では「七日」に出したと記されているが、実のところ、四日に和泉守のもとに届いている。すなわち、和泉守の文久元年の漢文日記である『南僊日録』（『真木和泉守遺文』）巻五、**十二月四日**の条を見ると、

晴。夜、平野　簡を贈る（高瀬より）。曰く、東来の亡人と遇ふ。一大事有り、云々と。

と、八郎たちの到来が告げられているのである。これに対して和泉守は、**五日**に、

晴。未明に角昭を高瀬に遣はす。

と、大鳥居照三郎（敬太の弟）を返書の使いとして遣っている。かくて、本稿では平野の書状執筆を三日の事と定めたのである。

その夜、二郎は、和泉守が島津久光に贈る書及び「神速説」を八郎たちに見せた。八郎は、これを読んで感動した。二郎が言う。

「薩摩侯は、大いに勤王の思いを抱き、もっぱら義挙の企てを興そうとされておる。そこで、拙者は和泉守と謀り、薩摩に入ろうとするのだ。幸い諸君が来てくれたので、大義は必ずや成就しよう」

二郎は、なおも声をひそめて言う。

「肥後の人間は、上辺ばかり飾って、実が少なく、油断がならない。肥後の議論倒れ、という言葉があるほどだ。ただし、松村と川上は、良い方であろうが、その外はよく見定める必要がある。大野鉄兵衛は江戸留守居役で不在だし、大成の弟の永鳥三平、及び宮部鼎蔵・轟武兵衛などは、最も人望がある、と大成は言うが、拙者は実意の無い者と見ておる。九州の人物は、和泉守を越す者はいない」

右に見える「神速説」とは、真木和泉守の「密書草案」（『真木和泉守遺文』）に「此已後のことは神速録に述ぶ」とある『神速録』のことであろうが、『遺文』の注に「神速録、今存せず、憾むべし」とあるように、既に佚せられている。

四日、川上彦斎も早朝に来たった。詳しい事情を聞いて、大層喜び、時期が到来したのに勇み立つ。年は若い（二十八歳）が、侠気がある。八郎は彼にも河内介の書状を渡した。

大成は、弟（二男）の大信を差し向けて、永鳥三平を呼んだ。この三平も、先年から蟄居しているとの事だが、その夜、大信が戻って来て言う。

「三平殿は、病だし、引っ越しもあり、来られないという事です」

そのように言ってはいるが、三平は実は八郎たちを疑っているから来ないのであろう。その上、三平は、もっぱら自身で謀主と任じていて、尊大にする風である。

五日、前述したように真木和泉守からは照之助（大鳥居照三郎のこと）という者を使いとして二郎のもとに返書をよ

こし、「蟄居の身ゆえ、安易に出かけては後の障りともなりましょう。二子（平野・伊牟田）が薩摩にお出かけになるのは、誠にこの上なく結構な事で、委細は照三郎から承りますゆえ、彼に隔意なくお話下さい」ということである。

これに拠り、

「伊牟田はすぐに薩摩に赴き、同志の者を募り、同志の者の様子次第では君侯にも義兵を出すよう勧めるため、また二郎は、右の和泉守が島津久光に贈った書状および「神速説」などを携えて、筑前の使者と偽り、関所に入り、薩侯の実父である久光殿に奉る事にしよう。二人とも関所の前までは一緒に行き、そこから別れるのが良いだろう。誠に良い機会であるから、もし君侯の方で受け入れなかったとしたら、有志の者を募るが良い。何にしても良い機会だ」

と行動計画を定めた。血の気の多い伊牟田は奮い立って、

「早速ひそかに薩摩に入り、諸同志を糾合しよう」

と言う。皆は、

「往来の道中で咎められるのが心配だ」

と危ぶむが、伊牟田は、

「虎穴に入らずんば虎児を得ずだ」

と勇むので、もはや止める事はできない。そこで、八郎は、美玉三平・桶渡（ひわたり）八兵衛・神田橋直助に与える、三つの書状を作った。それは「義兵を挙げたいから、来られたい。資金は森山董園（正しくは棠園。名は新蔵。薩摩の豪商）の方から出す筈である」という旨の物である。また「述懐詩叙」二篇を写し、これを伊牟田に托した。そして、なかなか綿密な八郎は、

「平野が失敗した場合には、伊牟田が成功するようにする。二人とも失敗して捕えられた場合には、私が肥後・筑前・

豊後の諸同志を集めて、必ず決起しよう。両人の往復には十日間、相談に八日間かかるとして、二十五日までに帰らなかったならば、捕えられたものとして、別に新しい手を考えよう」

と予定を立てた。例によって八郎は、両人を励ます詩を作る。「平野国臣に贈る」は、次のような作である。

既有回天勢　既に回天の勢い有り
風雲倶相苦　風雲　倶に相苦しむ
忽会還忽散　忽ち会ひ　還た忽ち散ず
遂施万里雨　遂に万里の雨を施かん

王政復古を実現できそうな時勢となったが、
波乱は多く、お互いに苦労する事だ。
会ったかと思うと、すぐにまた別れる。
やがては天下に慈雨を降り注がせようぞ。

平野二郎も、安政五年の大獄以来、福岡藩に追われていて、八郎と同様の身の上であるから、第二句には、逃亡者同志の一体感が表れているのである。

「伊牟田真風に贈る」は、次のような作である。

千慮尽国事　千慮　国事に尽くし
万苦募義師　万苦　義師を募る
十分已成九　十分　已に九を成す
一則俟君帰　一は則ち　君が帰りを俟たん

あれこれと思慮を国事に労し、
さんざん苦労して義軍の同志を集める。
事は十分の九までは成った。
あとの一分は君が帰って来てからだ。

第三句は少し言いすぎのような気がするが、八郎としては義師を挙げる計画がこの時点で随分進んだ、と思っていたのではなかろうか。

美玉三平（雷西と号す）は、元来は高橋雄二郎といい、薩摩の志士の巨魁であり、沈着にして奇策を有する。久しい間、江戸に游学していたので、奇節ある士は概ね交わりを結んでいる。見せかけだけの文武の士ではない、と八郎は評している。八郎がこの三平に与えた「美玉雷西に与ふるの書」は、『潜中紀事』四に収められており、それには「季冬六日」という日付がある。後述するように、八郎は六日には水田に赴いているから、実際には**五日**の夜中に作成したものと思う。よって、三書状の作成の日時を五日の事と定めたのである。それはさて置き、この書状の要点部分を訓読し

てみると、次のようになる。

今や天機忽ち発して、草莽の義侠を募り、夷狄を攘斥せんとの密旨有り。……則ち卑賤なること僕等の若き者をして、先ず西藩の義侠を徴し、一挙して錦旗を奉じ、然る後に天下に号令せしめんとす。是れ誠に万世一時、豪果英決の断、又何ぞ足下に疑ひあらんや。凡そ物極まらざれば反らず、夷狄猖狂し、城営を東都に修築するに至る。而るに奸吏益す之に親しみ、屡ば詔旨を廃斥し、罪已に天地に充塞す。且つ既に許嫁するの皇女を要して、陰かに天位を旋転せんとするの議有り。姦謀邪智備さに至る。蓋し亦た自ら敗亡を速くのみ。乃ち皇子某君を奉戴し、狄虜を斥逐し、幕府の奸吏を戮殲せん。……願はくは足下驟かに同志を促し、倶に身を皇室に致さん焉矣。……

老中安藤対馬守らが皇女和宮を将軍家茂に降嫁させ、然る後に孝明天皇を退位させ、和宮を女帝に戴くことによって、朝廷勢力を引き込み、夷狄と通商しようとしている。これを防止するために、攘夷の密旨を得て、朝彦親王を戴いた義軍を挙げるので、美玉ら草莽の同志が参集してほしい、という内容である。すなわち、八郎は、策士の面を発揮して、既に朝廷の許可を得、また朝彦親王の同意を得たかのように匂わせる、という技法を用いて、薩摩の同志を誘っているのである。

あとの「桶渡某に与ふるの書」と「神田橋某に与ふるの書」は、比較的短く、単に参集を呼び掛けているものであるから、紹介は省く。

かくて、平野二郎と伊牟田尚平は、**十二月七日**に薩摩に向けて旅立った、と八郎は記している。

八十一　真木和泉守

六日、八郎は、照三郎とともに八里隔たった水田の真木和泉守のもとに赴き、夜八時頃、和泉守のもとに到着した。この事は、八郎は、『潜中始末』に九日の事のように記しているが、『南僊日録』五には、十二月六日の条に、

晴。夜初更、角、清河八郎と来る。八郎なる者は羽の亡人なり。之を艮院に宿さしむ。

とある。八郎の日時についての記載には、記憶違いがあるようである。

水田という所は天満宮の鎮守所であって、太宰府に続く九州第二の天満宮である。和泉守は、大鳥居敬太の家に幽閉されているのだが、別に小さな一室を構えて居り、本来ならば一切人に会うことはできない。しかし、近頃は少しづつ遊歴者などにも会う、というので、八郎はひそかに小室に至った。（以下、続稿）

（とくだ・たけし　法学部教授）